宮崎惇

書下し長篇SF

《虹》作戦を追え

レインボー・オペレーション

TOKUMA NOVELS

TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

宮崎　惇
《虹》（レインボー・オペレーション）作戦を追え

Tsutomu Miyazaki © 1981

カバー画　谷口　茂　デザイン　池田雄一
本文挿画　山野辺進
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan　〈編集担当　橋本昭一〉

81I30b

書下し長篇SF

《虹》作戦を追え

レインボー・オペレーション

宮崎惇

TOKUMA NOVELS

《虹(レインボー・オペレーション)》作戦を追(お)え

宮崎(みやざき) 惇(つとむ)

四まれた長野県小諸市に住む宮崎惇は、
明を告げた同人誌『宇宙塵』に参加して以来の長いキャリアを持つが、
作意欲は、SFのみに留まらず、様々なジャンルに及んでいる。
時代小説には定評があるが、ミステリアスな手法による本書で、
能性が示された。昭和八年生まれ。

TOKUMA NOVELS

93-152319-5229

定価680円

TOKUMA

書下し長篇SF

《虹》作戦を追え

レインボー・オペレーション

宮崎 惇

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

プロローグ――7
第一章　国道十八号線バイパス――8
第二章　黒い影――29
第三章　生と死――61
第四章　謀略高原――105
第五章　東京ラウンド――139
第六章　ハワイ作戦――167
第七章　回帰の日――194
エピローグ――233

プロローグ

第二次世界大戦の最中、一九四三年十月、アメリカ海軍はニュージャージー州フィラデルフィア海軍工廠で、暗号名《虹》と呼ばれる常識を絶した極秘の実験を試みた。

当時、一つの仮説に過ぎなかったアインシュタインの《統一場理論》を軍事目的のため、実用化しようというのである。

《統一場理論》というのは、重力場、電磁場、強い相互作用、弱い相互作用といった四つの力場を物理学的に統一し、一つの方程式に帰結する理論だ。しかし、多くの仮説は立てられているものの、いまだ完全な《統一場理論》は得られていない。

実験は、海軍研究部試験所所長ハロルド・G・ボーエン大佐の指揮のもと、アインシュタインら多数の科学者も立ち合い、海軍開発の磁場発生装置により、工廠ドック内に停泊する駆逐艦エルドリッジ一九〇〇トンが、超強力磁場のなかへ置かれた。

アインシュタインの理論によれば、強い磁場をかけられた艦船には、強力な磁力場が生じ、レーダーならびに可視範囲内の光を完全に吸収する。すなわち、その状態の艦船は電波的にも光学的にも不可視化（透明化）するのである。

数分後、周囲に青白い緑がかった霧がたちこめ、みるみるエルドリッジ全体を包んだ。いつか、艦と甲板で働く乗組員の姿が透明化し、そして消えた。

透明効果は、艦の両舷から百メートル先まで扁円の球状体にひろがっていた。艦の浮ぶあたりの海面が、扁円球状にへこんで見えた。

が、次の瞬間、突如、実体化したエルドリッジは、ヴァージニア州ノーフォーク軍港へ姿を現わしていた。

直線距離にして、おおよそ四七〇キロを瞬間移動したのである。

しかし、それも、ほんの束の間で、数分後には、ふたたび透明化し、フィラデルフィアのドックに舞い戻って、実体化した。

実験は、予想外の成果をあげ得たと思われたが、エルドリッジに同乗していた士官、水兵ら乗組員ほとん

ど全員が実験後、無の空間へ消滅し、あるいは死亡し、あるいは凍結現象を起して、白痴、精神異常者となる悲惨な結果をともなった。

驚いた海軍当局は、これ以上はかり知れない現象が続出することをおそれ、丁度、マンハッタン計画（原子爆弾開発計画）が成功したこともあって、この統一場理論による透明化実験は不要であると判断、直ちに中止して固く秘密にされた。

そして、三十数年――。

第一章　国道十八号線バイパス

1

道路の照り返しが、まぶしい。

あくびが、また出た。

児玉俊光は、サングラスの奥の眼を何度もしばたたいて、睡気を追い払おうとした。

どこまで行っても追いつけない逃げ水が、黒々と前方を濡らしてゆらめき、うるさかった。

気温は三十度を越えているだろう。握るハンドルが、汗で滑る。

吹き込んでくる風もなまあたたかく、少しも涼にはならない。ランニング・シャツも、汗でびっしょりだ。

それにしても、眠かった。

《トラック野郎》といわれ、定期便の大型トラックを転がしはじめて、二十年、こんなことは珍らしかった。

碓氷峠を越えて軽井沢へ入ったのが、十一時半。往き帰り、いつも寄る道路際のドライブ・インで昼食をとり、一休みしたあと出発して三十分経っていた。

コーヒー一杯飲んだきり、朝食抜きで引き返して来たせいか、昼食を食べ過ぎた。焼肉定食で飯を丼三杯、それに冷しラーメンをたいらげ、コーラを飲んだ。

満腹感と疲労、それに起伏のあまりない平坦な国道十八号線の走行が、睡魔を呼んだのか。

いつもだったら楽しみな、浅間山麓沿線の景観も、眼に入らない。ただ、眠かった。

(おれも、歳だな……)

あくびをしながら、児玉は頭を振って苦笑してみた。

(知らねえ間に、もう四十二の大厄だものなあ)

「四十を越えたら、無理はきかねえよ」

と言っていた仲間の顔が思い浮んだ。

だが、この眠気は、尋常ではない。疲労とか、満腹とかで理由付けできない引きずり込まれるような、ひどい眠気だ。

逃げ水を追っていく眼がかすみ、ハンドルへのめり込みそうになって、はっと気がつく。瞼が重く、いつの間にか、くっつきそうになる。

(おかしい……)

少しでも気をゆるめれば、ふーっと眠りかける意識をはげまし、児玉は懸命に瞼を見開いた。

ラジオのスイッチを入れる。

なんだか、わけのわからない、やかましいリズムが、わっと耳を圧した。

暑い夏の昼が、よけいに暑くなる。

期待した五木ひろしか北島三郎の演歌は、どこの局もやっていなかった。

それでも、眠気ざましになるかと、しばらくボリュームを低くして、音を流しておいた。

だが、駄目だ。

かえって、眠りを誘う震動音になってしまう。児玉は、舌打ちして、ラジオをOFFにした。

右手に、長野スバルの古城営業所が見えて来た。国道十八号線は、ここで古城市内へ下っていく道と、浅間山の山裾を横切り、市街の上をかすめていくバイパスに分れる。

続けて出るあくびを噛み殺し、児玉は躊躇なく、道をバイパスに取った。

ゆるい上り坂だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

無意識にギヤを入れ、エンジンをふかす。
ディーゼルが、吠えた。
（もしかして……）
児玉は、ふと一つのことを思い当てた。
昼食をとったあと、胃の薬を飲んだが、あれが……？
長距離トラックの運転手には、胃をやられるものが多い。ほとんど一年中、車のなかで胃を圧迫する姿勢でいるのと、震動、それに運転最中の気疲れからのストレスが、その原因らしい。
児玉も、その例にもれなかった。
だから、胃腸薬をいつも常用している。食べ過ぎたといっては飲み、胸やけがするといっては飲み、身辺から切らしたことはない。
先刻飲んだのは、途中、高崎市内を通過したとき見かけた薬屋で、買って来た新製品だった。胃の動き、働きを活発にするとかいって、テレビのコマーシャルで派手に宣伝しているものだ。
丁度、手持ちの薬が終りかけていたのを思い出し、とび込んだら、薬屋の老いた店主が、それを渡してくれた。
確かめもしないで、金を払い、貰って来たが、どうやら催眠作用もあるようだ。
他に、この眠気の原因は思いつかなかった。
（しまったな……）
と悔む。
坂をのぼりきったあたりで、バイパスは右へ曲る。
左の斜面の下に、人口五万の古城市の街並みがひろがっていた。
バイパスの両側にも、家が次第に多くなった。市営か県営の住宅なのであろう。そっくり同じ形の家並みが、バイパスの上にいくつも見えた。古城市街が、坂の上へ上へと延びていくのが、わかる。
信号も、多くなった。
眠気は、いっこうにおさまらない。
赤信号で停車したとき、児玉は、これで何十回目かのあくびをし、眼をこすった。
そろそろ古城警察署も近い。しっかりしなくては、いけない。
そのうちには、薬の効果も、なくなるだろう。もし、どうしても眠くてたまらなかったら、座席うしろのベッドで寝入っている交代要員の丹野を起して、代ってもらおう。ゆうべ、直江津から東京まで運転させたの

で、ブウブウ言われるかもしれないが、あとで酒の一杯も飲ませれば、いい。とにかく、明るいうちに、行けるところまでは行かなければ……。児玉は、そう思った。

土手の上は、高校が、少し行けば小学校が現われる。何度も往復するうち、児玉は、直江津から東京までの国道十八号線の沿線のあらかたを、覚えた。

プールで泳いだ帰りらしい真黒に日焼けした子供たちが、校門を出て、バイパス傍の歩道を、ぞろぞろ歩いていく。

信号が、赤になった。

手をあげ、数人の子供たちが、横断歩道を渡りはじめる。

眠気とたたかいながらブレーキを踏み、児玉はトラックを停めようとした。

が、トラックは停止しなかった。逆に、スピードを増して、突進した。

「ああっ」

甲高い悲鳴が、児玉の眠りを覚ました。

ブレーキでなく、アクセルを踏んでいる。

あわててハンドルを右に切った。

そこには、タンク・ローリー車が……。

人影がよぎったのも、そのときだった。

2

廊下の柱にかかっている大きな寒暖計は、三十三度六分をさしていた。

今日も、たいしたネタはなかった。

観光ビザで入国し、古城・佐久市内のバーやクラブで働く東南アジアの女たちの内偵を、警察が進めていることは、うすうす感づいている。だが、いつ一斉検挙するのか、さっぱりわからない。相当しつっこく、刑事たちに探りを入れるのだが、訊きだせなかった。

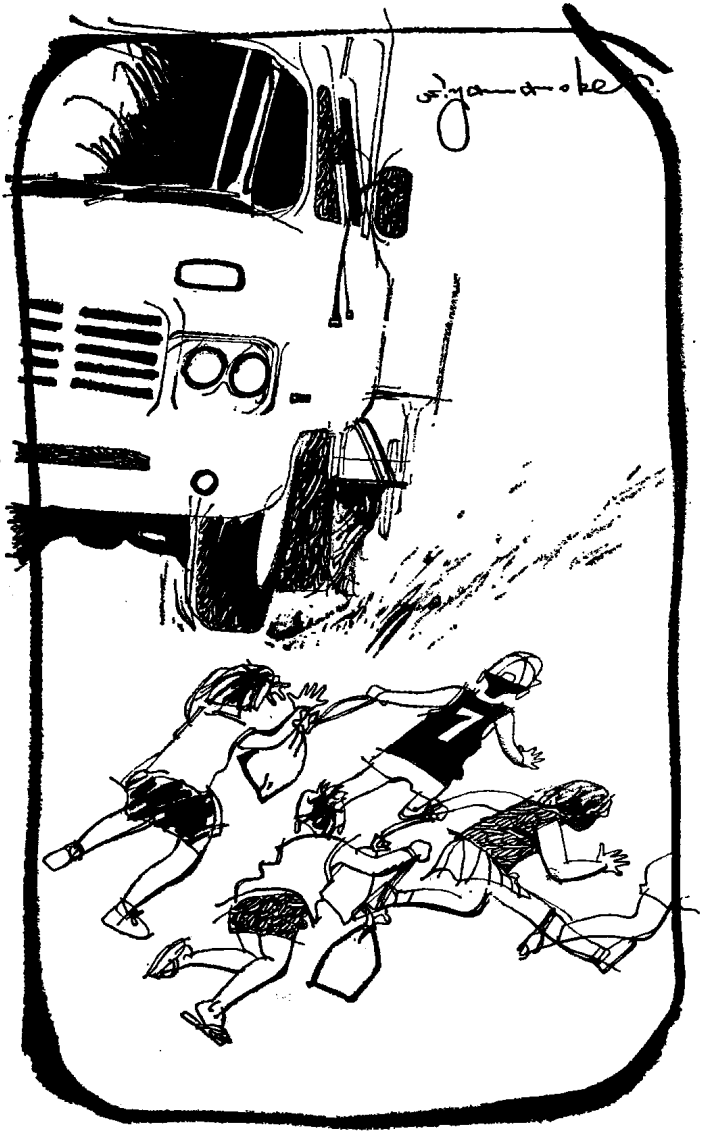
噂では、彼女たちのなかには、売春をしているものも多いという。長期滞在するために、日本の男をだまして結婚し日本国籍をとると、数日で蒸発してしまう悪質なものもいるらしい。しかし、噂だけでは記事にはできない。

海江田善之は、古城警察署を出た。

外は、うだるような暑さだ。

道をへだてて向かい合う高校から《流浪の民》の歌

声が流れてくる。
この高校のコーラスは、長野県下の高校のなかでも上位クラスの実力があった。
信州日日新聞の古城通信部へ来て、三年目の海江田だったが、二度記事にしたことがある。
いまは夏休みだが、秋に行なわれる全国高校合唱コンクールへむけての練習をしているのだろう。
セミの鳴き声が、歌声を煽るように響いていた。
最近では珍らしい。こんなに鳴いているのを聴いたのも、久し振りみたいな気がした。しかし、暑苦しい。
(暑いなあ……)
海江田は、手をかざして、空を仰いだ。
肩に吊したニコンF3が、やけに重く感じられる。
(市役所でも覗いてみるか……)
その前に、自宅へ戻って、下着をかえようと海江田は思った。
愛車のホンダ・シビックCVCC一二〇〇GLで、国道十八号線へ出て、小学校の下までくる。
プールから聴える子供たちの歓声が、真夏の昼下りであることを、改めて思わせた。
窓を閉め切り駐車しておいたので、車内は、むんむんしている。今更、ガラスを全開してみても、ほとんど効果はなかった。
まったく、水の中へでも飛び込みたい暑さだ。
しかし、この町には大人たちの使える市民プールがない。数年前から市民の強い要望があったし、去年秋の市長選挙でも、この市民プール建設が、大きな公約になっていた。だが、用地買収がはかばかしくないという理由で、目処さえまだ立っていない有様だ。
今年も、古城市民たちは、隣の東部町や上田市のプールへ押しかけていっているのだろう。町民のためのプールを、古城市民に占領されて怒った東部町の人々が、古城市民ボイコット運動を起すというような噂さえ、耳に入って来ている。
(何もなかったら、これを記事に……)
市長、助役、それに土木建設関係の市会議員からコメントをとり、あと、駅前通りで数人の市民に、また、東部町のプールへ泳ぎに来ている古城市民、それに東部町民の話を聞けば、何か記事ができそうだ。
信号が、黄色になった。
海江田は、車を徐行させ、停りかけた。
すぐ前を走っていた東京方面からの帰途らしい新潟



ナンバーの定期便大型トラックが、どうしたのか、すごい勢いで突進したのが、そのときだった。
横断歩道を、手をあげながら渡りかけた水泳帰りの子供たちの悲鳴が、夏の大気を引き裂いた。
大型トラックは、十一トンの巨体を振り、あわてたように右方へ方向を変え、白線をよぎり、対向車線へ突っ込んだ。
そこにも子供たちが、いた。
「危ないっ」
舗道を歩いていた二十六、七歳の長身の男が、一瞬、トラックの前を風のように子供たちめがけ走った。グリーンのポロシャツに、茶色のスラックスを着ている。その残像をはっきり目に焼きつけ、海江田は、カメラを片手に、車をとび出していた。シャッターが、音をたてた。
いつ道端へ停車させたのか、覚えがない。無意識のうちに、そうした行動がとれたのは、新聞記者となって五年のキャリアのなせる業だったのかもしれない。
子供たちは、ぬぐい去ったように、その場から、かき消えていた。
生贄を失った大型トラックは、怒ったごとく、がくっがくっと二度ほど向きを変え、信号待ちしていたタンク・ローリー車へ正面から激突した。
凄まじい衝撃音とともに、タンク・ローリー車は横にかたむいた。
奔った緑光が、大型トラックとタンク・ローリーを包み込んだ。
海江田は、続けてカメラのシャッターを切った。
「逃げろっ、爆発するぞっ」
誰かが、肩を引っ張った。
「かまわんでくれっ」
腕を払い、海江田はシャッターを押し続けた。
あたりに、音はなかった。
いま、海江田の耳に聴えるのは、自分のカメラのシャッター音だけだった。
何分かして、ふと、われに返った海江田の耳に、車の警笛、野次馬のざわめき、近づいてくるパトカー、救急車のサイレンの音が、一時に、わーんと押し込んで来た。
車は、上り下り車線とも、数珠つなぎになって、延延と続いている。
カメラをおろし、立ちあがった海江田は、衝突した

大型トラックとタンク・ローリーへ、もう一度、視線をやり、唖然として、息を飲んだ。
（こ、これは……）
爆発を起すどころか、激突した二台の大型車は、なんと、その車体をすっぽり、真白な氷で覆われていたのだ。
自分の眼を疑い、海江田は、ぎらぎら照りつける太陽を仰ぎ、浅間山の山嶺に湧き立つ白い積乱雲を見て、周辺を眺め廻した。
誰も彼も、ノースリーブか、短い袖の夏姿だ。
錯覚ではなかった。
「今日は、八月三日……」
口に出して、言ってみる。
この、うだるような暑さの真昼に、車の氷づけが出来るというのは、あまりに奇怪だった。
衝突したショックで、大型トラックが積んでいた何かの化学薬剤でも空中に散り、混り合って、氷をつくったのか？
（解せないな……）
棒立ちになって瞶める海江田に、
「カイちゃん、こりゃぁスクープものだね」
声をかけて、数人の警官が氷づけになった二台の衝突車へ近づいていった。交通係の服部警部補たちだった。
（そうだった……）
頭を殴られたように、海江田は、ふたたびカメラを構えた。
他社の記者は、まだ誰も来ていない。
腕時計を覗く。時刻は、一時二十分過ぎだ。
充分、夕刊に間に合う。
氷は、すでに溶けて気化しはじめていた。
この炎天下、三十分ともたないだろう。
カメラのシャッターを連続して押しながら、海江田は、ほくそ笑んだ。
他社の連中が駈けつけたときには、ここも単なる普通の事故現場にしかなっていないだろう。
事故車の運転手を引きずり出そうと、ドアに手をかけた何人かの救急隊員と警官が、悲鳴に似た叫びをあげた。
「ひでえもんだ、すげえ冷たさだ……」
声が聴える。
それでも、ドアの取手を握り、力まかせに引い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor